

令和8年2月17日
教育課程部会
芸術ワーキンググループ
資料 2 - 1

第6回芸術WG

鳥取県立美術館
の
学校連携について



A.L.L.presentsあーとのとびらをひらく展覧会シリーズ01 「小松宏誠—光と影のモビール」の会場で
『海のモビール』作家蔵 を鑑賞する子どもたち

鳥取県立美術館



A.L.L.presentsあーとのとびらをひらく展覧会シリーズ01 「小松宏誠一光と影のモビール」の会場で《海のモビール》を鑑賞する子どもたちと小松氏



A.L.L.presentsあーとのとびらをひらく展覧会シリーズ01 「小松宏誠—光と影のモビール」の会場で《Lifelog__シャンデリア》作家蔵 を鑑賞する子どもたち

OPENNESS !



教育普及の拠点として

アートを通じた学びの研究室「アート・ラーニング・ラボ」=A.L.L.を設置

(機能及び事業内容については、資料1 (P.17)、2 (P.18) を参照)



鳥取県立美術館 2025年3月30日開館

美術館で行う鑑賞プログラム

- ・静かに見る・学芸員の解説を聞きながら見る・音声ガイドを聞きながら見る
- ・模写をする・まねる・詩をよむ・触る・ワークシートを活用しながら見る
- ・対話する



尾崎悌之助《こま犬の怒り》1982年
鳥取県立美術館蔵

成果－子どもたちの表現や鑑賞の姿から

事例 1 ・ 2 ・ 3	本物との出会い	作品の存在感を感じながら、描かれたものの詳細、質感や素材感、角度や距離による見え方の変化等に気づくだけでなく、全体のイメージをとらえて味わうことができる
	じっくり見ること	鑑賞の活動において「じっくりと見ること」からスタートすることによって、子どもたち自身の感覚で作品をとらえたり、感じ取ったり、それをもとに思考したりすることができる
	対話すること	鑑賞において、発見したことや感じ取ったこと、考えたことを、子どもたち同士やファシリテーターと対話することによって、子どもたち自身が自分や友達の持つ「見る力」に気づき他の場面でも活用しようとする 友達やファシリテーターとの対話によって、作品の見方が広がったり、深まったりする体験を通して、アートと出会い、思考することの楽しさを知ることができる
事例 4	作家との出会い	作家の思いや制作意図を知るとともに、イメージを形にするために作家が用いている技術や素材などに触れることができる
事例 5	美術文化との出会い	自分たちとは異なる文化と出会い、学芸員やファシリテーターの話を聞くなどして、その時代や社会について思いをはせ、そこで大切にされていることなどを、自分たちの文化と比較したりつなげたりして表現や鑑賞をすることができる

課題－学校との連携について

美術館と学校をどうつなげるか	将来の変化を予測することが困難な時代だからこそ「アートを通じた学び」は子どもたちに必要な力をつけていくために不可欠なものであり、美術館がそのための「学びのツール」の一つとなることを美術館のスタッフが自覚するとともに、教師や教育委員会、保護者や子どもたち自身にも伝えることが必要
学校との関係のつくり方	夏休みなどに美術館への来館の機会をつくる、HP等で授業や教員研修等についての相談に対応していることを伝えるなどして、学校のニーズや困っていることを聞き取れるような関係をつくり、協働する
プログラムの作成について	子どもたち自身が思考・判断し、学びを深めていけるような表現や鑑賞の活動となるように、事前に担当教員等と対話しながらプログラムをつくり協働するとともに、実施後の検証などについても対話し、発信する

鳥取県内全ての小学校・義務教育学校・特別支援学校小学部の4年生を、毎年、美術館へ招待

MUSEUM START BUS

※バスの手配や費用負担は県が負担（参加校の負担軽減）

毎年、県内の小学4年生を招待するバス招待事業をミュージアム・スタート・プログラムとして位置づけ、開館年から毎年続ける。

美術館で子どもたちが本物に触れ、鑑賞を楽しみながら美術に親しみを持つことを目的としている事業。

来館の際には、子どもたちを少人数のグループに分け、美術館スタッフや研修を受けたボランティアスタッフがファシリテーターとなって館内を巡り、安心感を持って、対話しながら鑑賞を深めていけるようなプログラムを実施している。

特別支援学校の小学部4年生の児童で、居住地校交流での来館が可能な子どもたちは、交流している小学校の4年生とともに来館する。交流校との来館が難しい場合には、状況・希望の有無に応じて館内や館外でのプログラムを提案し、ミュージアムやアートに触れる体験をつくっている。



企画展「The 花鳥画」の会場で対話をとおして鑑賞を深める子どもたちとファシリテーションを行う大学生

令和7年度 来館校 110校／127校（県内小学校・義務教育学校数118校、特別支援学校9校）

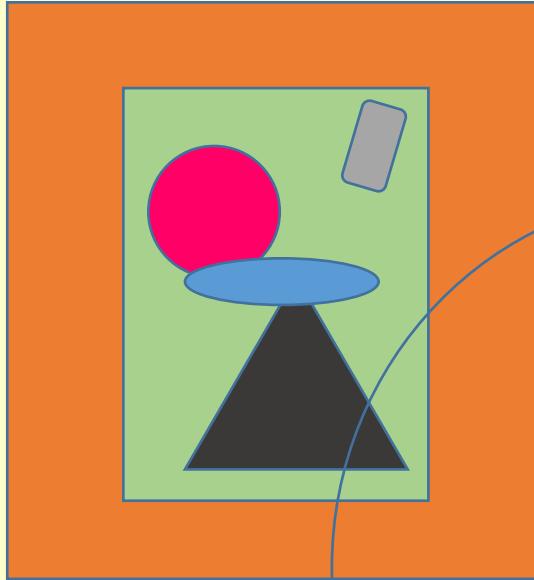
前期（5月～9月）65校 · 後期（10月～3月）45校 計4,331人

来館予定なし 17校（県内小学校+義務教育学校8校+特別支援学校9校）

※4年生が不在の学校1校、特別支援学校は館内外での個別のプログラムで対応

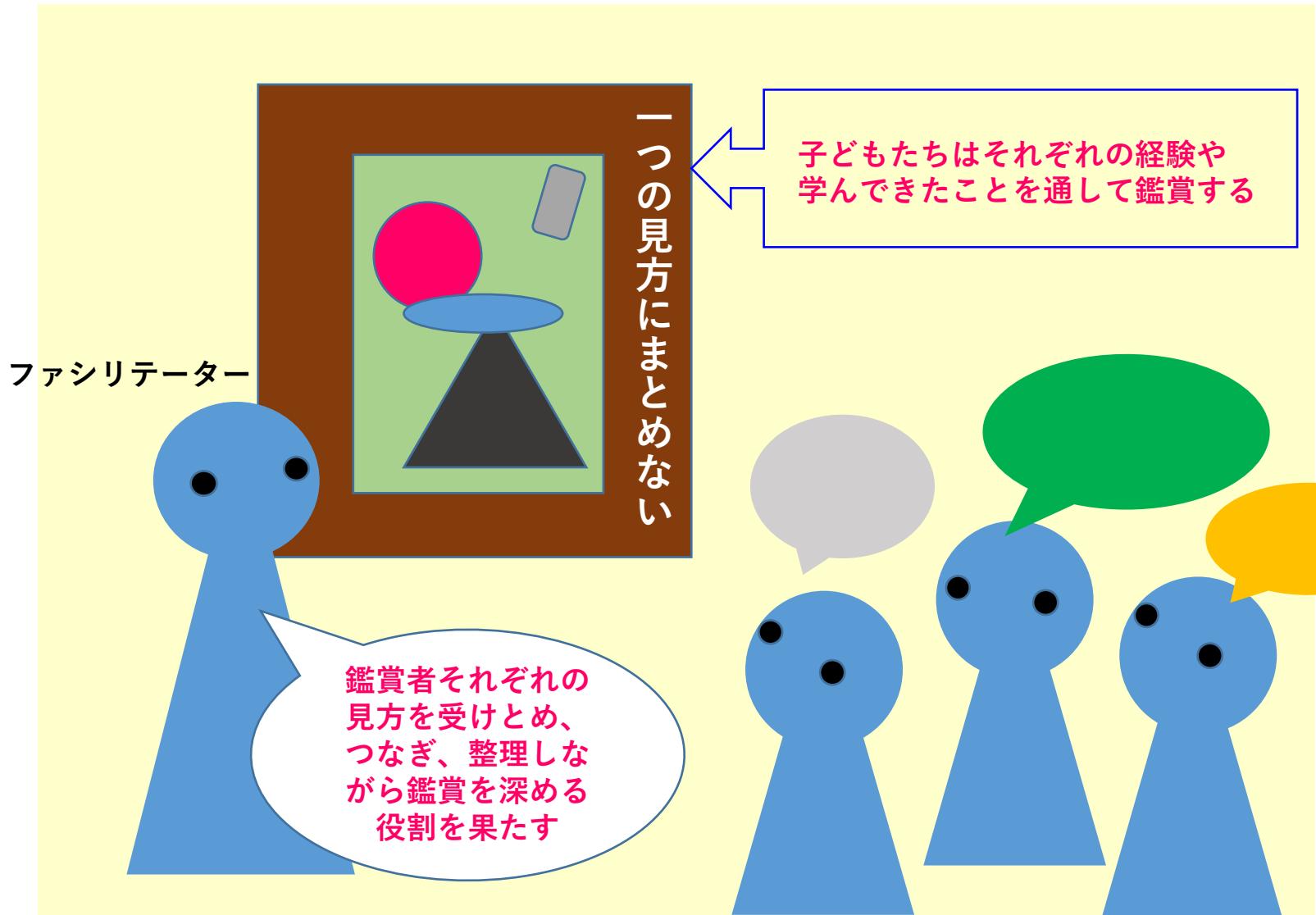
鑑賞するとは

鑑賞者が
自分の中に新しい意味や
価値をつくりだすこと



作品の見方は自由。
正解は一つではない。





MUSEUM START BUSでは、対話を用いた鑑賞をプログラムの中心においているため、子どもたちを少人数のグループに分け、ファシリテーターが一人ずつについて案内している。

対話を用いた鑑賞の流れ



対話を用いた鑑賞活動で 子どもたちが行っていること

好奇心を持って物事を詳細にみる

問題や課題の発見をする

目の前にある材料を取捨選択して発想を広げ、創造的に思考する

他者に関心を持ち、異なる意見にも共感し、自らの思いや意見を表現する

答えのない状態を受け入れ、判断を保留にしながら対象と向き合い続ける

様々な意見を認め合いながら、自分にとっての納得解を大切にする

自らの感性や思考を発見し他者に認められることで自己肯定感を育む



鳥取県立博物館企画展「東郷青児と前田寛治－二人の道」の会場で、
東郷青児《超現実派の散歩》（左）、東郷青児《窓》（右）2点ともSOMPO美術館蔵
を鑑賞する子どもたち



鳥取県立博物館企画展「ARTってなに？」の会場で、辻晉堂《非化Q》1967年
鳥取県立美術館蔵を鑑賞する子どもたち



鳥取県立美術館開館記念展「ART OF THE REAL」の会場で、ロバート・モリス《無題》1968年 大阪中之島美術館蔵を鑑賞する子どもたち

対話をとおして鑑賞を深めたこどもたちの感想

・私が一番勉強になったことは、よく見る力と自分の意見を伝えることです。この絵は夕方だな、夜だな、ここは海だな、この人はこんな気持ちだなど考える力がつきました。絵はよく見ればいろんなものが見つかるし、この人たちはなんか関係があるのかなあって考えて見れば、いろいろ見つかりました。よく見る力を学校で生かしていきたいです。

・作品を見ていると、だんだんアイデアが見つかって「これかな」「いや、やっぱりちがう」とか、みんなでそれを見つけたり、「ここがおかしいよ」とか、色々考えたりするのが楽しかったし、班のみんなと仲良くなったりした。だからこれからみんなで努力して、仲よくがんばっていきたいです。

子どもたちの鑑賞についての先生方の感想



小早川秋聲《万相有情 歌僧圓位》1927、1962年補筆
個人蔵 烏取県立美術館蔵を鑑賞する児童

来館校から提出された事後アンケートのまとめについては資料3（P.19）を参照のこと

1枚の絵をしっかり見て意見交換をすることがとても楽しかったようで、図工の鑑賞だけでなく、他の教科でのグラフや図などについても、細かいところまで注目して見ることを意識している子が増えた。

(ファシリテーターが) 美術鑑賞の視点をレクチャーして下さり、子どもたちも自然体で鑑賞を楽しむことができた。

美術館での鑑賞は一人で静かに自分の心と向き合うものなのだろうが、グループで感じ方を交流するスタイルは、子ども達にとって楽しく、有意義な活動だった。

県立美術館について興味が湧くだけでなく、教室では見られない児童の姿を見ることができた。

一つの作品について子どもたちの感じたことを丁寧に引き出してください、子どもたちもとても楽しそうに発見を話していた。友達の意見に「たしかに！」と言しながら聞いていて、自分の感じ方を広げながらじっくりと作品を味わうことができたすばらしい時間となった。

第20回鳥取県中学校教育研究会美術部会研究大会

– 美術館と連携を図った授業づくり



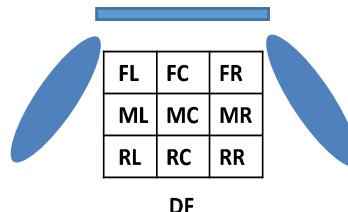
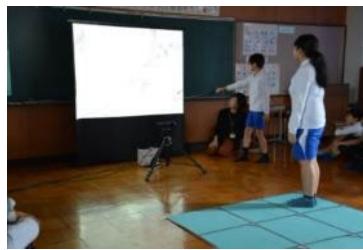
館内コレクションギャラリーを鑑賞授業の教室として使用。プレ授業を重ね、研究大会当日も展示された本物の作品の前で気づいたこと、考えたことや感じたことをことばにし、対話を通して鑑賞を深めていった。

授業後の研究協議の指導助言、後援会等は美術館の教育普及担当が依頼されて行った。

鳥取県立美術館を会場に、教育普及担当が講師等を依頼されて開催した教育研究会等（R7年度）

- ・第20回鳥取県中学校教育研究会美術部会研究大会 – 美術館と連携を図った授業づくり
- ・令和7年度中部小学校研究会一斉研究会 図画工作部会@鳥取県立美術館
「対話鑑賞の理論と体験・一人1回ファシリテーション体験」
- ・第69回鳥取県保育推進研究大会 – こどもまんなか社会の実現に向けて～今、私たちにできること～
第4分科会「対話鑑賞～本物との出会い」
- ・松江市美術部会夏季研修会「鳥取県立美術館 アート・ラーニング・ラボについて」レクチャー・館内見学

Walk Viewを活用した作品鑑賞



デジタル鑑賞教育コンテンツ「Walk View」を活用した鑑賞授業

○「Walk View」の開発、制作について
デジタル鑑賞教育研究チームと大日本印刷株式会社が共同で開発

○「Walk View」とは
絵の中に入り込んだような感覚で疑似体験ができるデジタル鑑賞ツール。
鑑賞者の動きをスクリーンの前に置いたセンサーで読み取ることで映し出された作品を変化させ、鑑賞者が絵の中に入っていくような感覚で鑑賞できる。

「Walk View」を使用した鑑賞授業のねらい

- ・「Walk View」を使用し絵の中に入り込むような感覚で鑑賞することで、自身の体験と結びついた鑑賞となるようにする。
- ・描かれた主題だけでなく、背景に描かれたものや工夫などにも目を向けるようとする。
- ・絵を隅々まで見ることが、その絵の持つストーリーを自身で考える楽しさや、作家の意図などを読み取る楽しさに繋がることを体感させる。
- ・本物を鑑賞する際にも、視点を持って鑑賞出来るようになる。

展示室で本物と出会った際に気づかせたいこと

- ・色彩や質感など、本物の作品だからこそ感じ取れる印象等
- ・掛け軸の仕組みや美しさ、そこに見られる日本の文化や知恵
- ・例えば、沖探容《四季富士図》に見られる特徴
一つの画面に四季が描かれていること、霞が生み出す時間や距離の表現等
- ・作品の実際の大きさ



沖探容《四季富士図》江戸時代（18～19世紀）鳥取県立美術館蔵

高等学校生徒の感想（抜粋）

- ・四季富士図の画像を見た体験で解ったことが2つあります。1つ目は一枚の絵で30分以上も見られる事が驚きました。私は一枚の絵で長くて2分しか見ていなかったからです。2つ目は、一枚の絵の中にたくさんの事が描かれている事も気づけました。この体験を踏まえて美術館に行くときは絵を深く探ってみたいです。
- ・僕はこの絵を見て、四季を感じる事ができました。1枚の絵を50分かけて見ていると、1枚の絵でもたくさんの情報を読み取れる事も知りました。とても良い体験になりました。

アーティストとつくろう！



左：アーティストの松本文仁（まつもと・ふみひと）氏
右：廃材を使って制作された松本氏の作品



「いおんにいけるバイク」



「象」

昔給食で使われていた金属製の器を2個合わせて頭に。家庭科室のしやもじを耳に。
足は棒やすりの持ち手。



2026年3月に閉校を迎える小学校の全校児童によるワークショップ
令和7年度 アーティストとつくろう！in ●●小学校
みんなで過ごした校舎の思い出が詰まった
オブジェをつくろう！

平面作品だけでなく、廃材を使い魅力的なオブジェを多数制作するアーティストの松本文仁（まつもと・ふみひと）氏を講師に、オブジェをつくるワークショップを開催。

材料は、校舎内外にある木材や廃棄される教材、器、紙や布など。

「みんなで過ごした小学校での特別な体験」をさせたいとの相談を受け、大人になっても小学校生活を懐かしく思い出せるようなオブジェをつくるプログラムを提案し、作家を招聘した。



「ロボットトレインボー」



勉強を教えてくれるロボットの体は、校庭の隅にあった木の机をカットしたもの。
頬は算数で使った教材。

おとどけコレクション



【鑑賞】味わってみよう和の形 → 手ぬぐいの制作（小6）

授業で和の文様を学習するので、関連したコレクションを学校に持ち込み、鑑賞させてほしいと依頼を受ける

絣の手触りや文様を鑑賞



学芸員から、絣が制作された時代や社会、吉祥紋、それぞれの文様に名前があるといった話を聞く

手ぬぐい制作のために子どもたちが考え出した文様にも、自分たちの願いのこもった名前を付けることとなった



【鑑賞】版画、工芸、彫刻など10作品程度を鑑賞（中3）

一つの作品をクラス全員で鑑賞

- ①作品を1分間静かにみる
- ②作品の中に見つけたものや考えたこと感じたことを対話し、鑑賞を深める（15分程度）



グループごとに展示された作品を巡り、対話したり、工芸品や彫刻にそっと触れたりして、鑑賞する

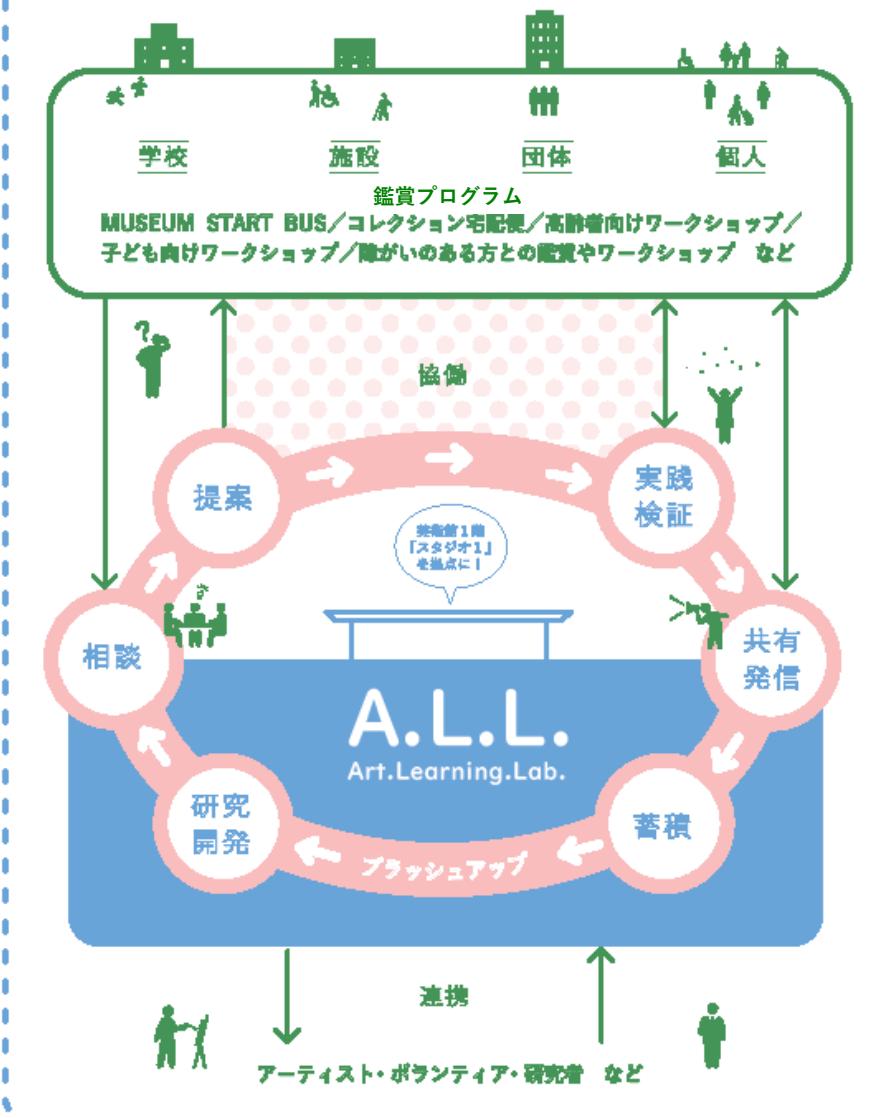
振り返り

アートを通じた学びの研究室 アート・ラーニング・ラボ (A.L.L.) の機能

子どもたちをはじめとするすべての人々が、アートを感じて楽しむことをめざして、アートを通じた学びにまつわる調査研究と事業実践を推進する

アート・ラーニング・ラボ

「A.L.L.」の機能



鳥取県立美術館 教育普及事業（A. L. L.）一覧

概念図	内容	
「A. L. L.」の機能	館内	教育普及的展示の開催（あーとのとびらをひらく展覧会シリーズ）
		「MUSEUM START BUS」の実施（県内の小学4年生を対象としたバス招待事業）
		スペシャルアートプログラムの実施 ・ワークショップ ・トークセッション ・アートレクチャー ・ギャラリートーク
		対話鑑賞ファシリテーターの養成
		特別講演会・シンポジウム・レクチャー・研修会等の開催
		学校や外部機関からの相談対応
	館外 アウト リーチ 事業	ワークショップの実施
		アーティストとの連携W. S. や 鑑賞授業
		おとどけコレクション (鳥取県立美術館のコレクションを学校や施設等に持ち込み一日限りの展覧会を開催)
		学校等の鑑賞授業サポート
	レクチャー・研修会の開催	
	その他 (調査・研究)	大学等と連携したアートを通じた学びの研究
		先進館・先進校等の視察、研修会・シンポジウム等への参加
		ワークショッププログラムの開発（特に、美術館にアクセスしにくい方のためのプログラムの開発）

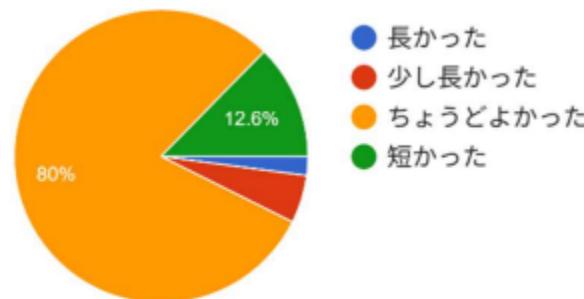
令和7年度 鳥取県立美術館【前期：5月～12月実施分】「MUSEUM START BUS」事後アンケート

※111校来館、81校95名の先生より回答（12/24現在）

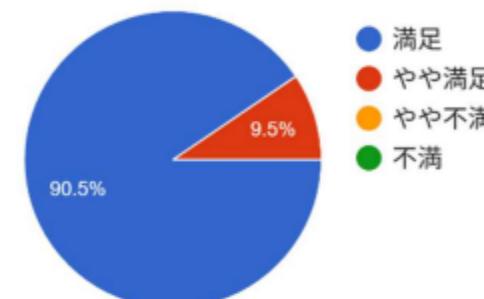
要約版

1. 選択回答（集計）

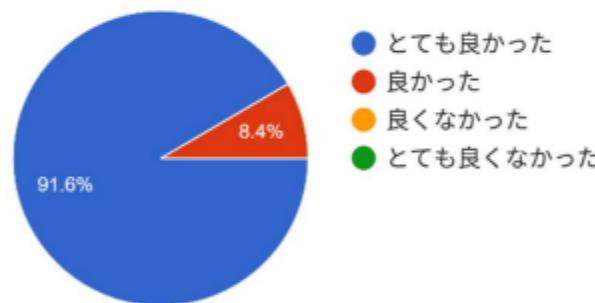
問1. 鑑賞プログラムの時間（100分）について



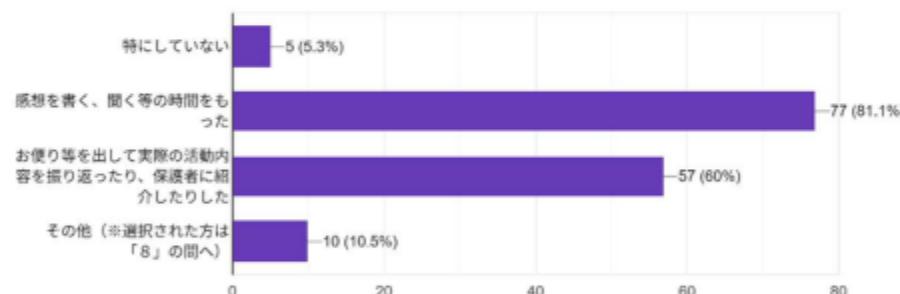
問2. 鑑賞プログラムの活動内容について



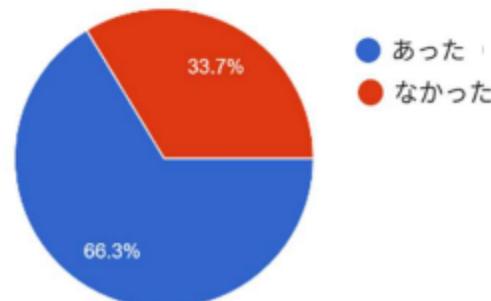
問3. 子どもたちの反応について（当日や事後の様子）



問4. 学校での振り返り等について（複数選択可能）



問5. 事後に子どもや保護者、先生方から何か反応はありましたか



問6. 申し込み手続きやバス会社との連絡・調整について

